

人生一発勝負

平成十一年度(第五十四回)
文化庁芸術祭
演劇部門
優秀賞受賞



愚安亭遊佐ことり宛居

七〇才でなくなった母の生涯を語るこの芝居を始めたのは
私が三三才の年。

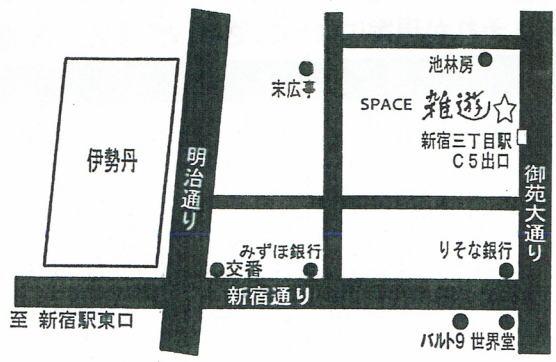
母が死んだと同じ年になるまで、続けようと心に決めた。

あれから三八年。

ついにその時が来てしまった。

SPACE 雑遊

(開場は30分前)
10月4日(水)PM7:00開演
5日(木)PM7:00開演
6日(金)PM7:00開演
7日(土)PM3:00開演



チケット
前売り3500円
当日4000円

お問い合わせ・予約 遊佐企画
木本 090・2328・1175

70になってしまった。人生一発勝負のモデル、母のなくなった年。ここまでやるのが当初の目標だった。あつという間に来てしまった感じだ。さあ、どうする？

私が、ひとり芝居を初めて、今年(2017年)で38年になる。初演は1979年の夏、私は33歳だった。今にして思えば、この年が、私の人生の転換点であった。

22歳の時から続けてきた東京での集団での芝居に見切りをつけ、東京のアパートを引き払い、ポストンバックひとつで帰るところのない旅に出ることにした。旅芸人になるには、ひとり芝居が身軽でよかろうという開き直った思いと、そうせざるを得ない状況への花向けのつもりでひとり芝居を作った。

このひとり芝居を作るには、作るなりの大きな要因があった。

私の母の死。母がこの芝居を作らせたのだ。

母が70歳でなくなったのは1976年。亡くなる3日前、青森市の病院に母を見舞った私に、語るでもなしに語った『私はここに嫁にくる女ではなかった』の一言。それが、私が聞いた母の最期の言葉。一瞬何のことかわからなかった。ところが死んだ後から、その言葉が耳にへばりついてはなれない。

その言葉の意味を求めて、3年さ迷い、これはひとり芝居にするしかないと思った。芝居のほかに表現手段を持っていなかった。

中学を卒業して、家を離れたために少なかった母とのよすが。それをほじくりだして、なんとか初演をやった。上演時間は50分。3年かけて、母の核心へ触れられたと思ったのはそれだけの時間だった。思いだけが先走った、心情あふれる、母親恋しやほうやれほの芝居だった。

その芝居を抱えて、『日本列島行脚の旅 劇団ほかい人群』と車に大書し、投げ銭をもらいながら、沖縄から北海道まで日本列島を巡り、月に10回から15回公演を重ねた。下北半島の村々を細かく巡り、恐山の賽の河原でも、やった。そこで思いがけずに、母を知る生まれ故郷の年寄り達に出会い、山ほどの母のエピソードを聞いた。それを全部盛り込んだら、芝居は一気に3時間を超えた。

それからも取捨選択をし、上演時間は短くなったり、長くなったり、それでも母の言葉の謎は解けていない。しかし、その繰り返しの中で、わかりかけてきたこともいくつかあった。人は生まれる場所も、時も選べない。ただ生まれた事実を引き受け、生きるしかない。明治、大正、昭和を生きた母は時代に翻弄されながらも、己の命を全うした。その母の生涯を語ることで、1500回を超える上演をし、共感を得てきた。

70歳は、私の目標であった。母が死んだ年と同じ年になるまで続けたかった。し続けられるとは思っていなかったからだ。それが現実になった。さあ、どうする？自問の声が胸に響く。

答えは他にない、やり続けること。死まで行かないと、母の言葉の謎はとけまい。



愚安亭遊佐